

# 守谷慶友病院から発信する 新たな地域医療のカタチ

日常では考えないことに目を向ける特集「みえない視る」。  
もし自分や家族が救急搬送されて、在宅療養が必要と言われたら——  
今回は、守谷慶友病院で急性期の患者さんに向き合うとともに、訪問  
診療で自宅で過ごす患者さんとも関わる青柳滋先生に話をお伺いしま  
した。  
病気になっても「少しでも長く元気に過ごし続けていただきたい」と話す青柳先生が取り組む地域医療とは。超高齢社会  
の地域が直面する課題や、医療と介護、福祉、生活支援が連  
携することで見える可能性を聞きました。



## 巻頭特集

みえない  
を視る

### 脳卒中治療の入口から在宅まで

「守谷慶友病院には様々な診療科がありますが、青柳先生はどのような患者さんと接することが多いですか？」

主に脳の病気を抱えた方を診ています。守谷の地域課題の一つに「脳卒中の治療をする受け皿が少ない」ことが挙げられます。脳の病気は「脳卒中センター」の認定を受けた病院でないと受け入れが難しいため、どの病院でも同じように治療が出来るわけではないのです。慶友病院は僕が赴任してから「一次脳卒中センター」の認定を受けました（2022年）。これにより、カテーテル治療を含めた診療体制が整い、発症後搬送時の最も危ない状態である「脳卒中の急性期」に対応しています。

ただ、脳の病気を診ていて思うのは「一番最初の状態（急性期）を診ていけば良いわけではない」ということです。病気によっては後遺症が残ることがあります。患者さんは「後遺症とどう付き合えばいいのか」と不安や絶望を抱えています。そういった方々にも、その後の人生を少しでもハッピーに生きていただきたい、それが僕の一番の願いです。

「急性期治療を過ぎた後の流れはどうなりますか？」

患者さんは危ない時期を乗り越えたら、リハビリをしていきます。当院はリハビリにも力を入れていて、特徴の一つは、ご家族にリハビリの様子を見ていただくことです。

病院職員だけでなく、ご家族も一緒に「退院までの目標設定」をして準備を進めます。

そして、退院後の選択肢の中に「在宅」があるんです。

### 病院も在宅もうまく利用して

「先生は訪問診療にも携わっていますね。なぜ病院と兼務をしているのでしょうか？」

週一回「みんなの在宅クリニック守谷」で訪問診療をしています。病院の外来診療では、足腰の衰えや閉じこもりがちになることで、通院が難しくなる方々を見てきました。そういった方々にも関わりたいと思っていて、実際に声をかけてもらったのがきっかけです。

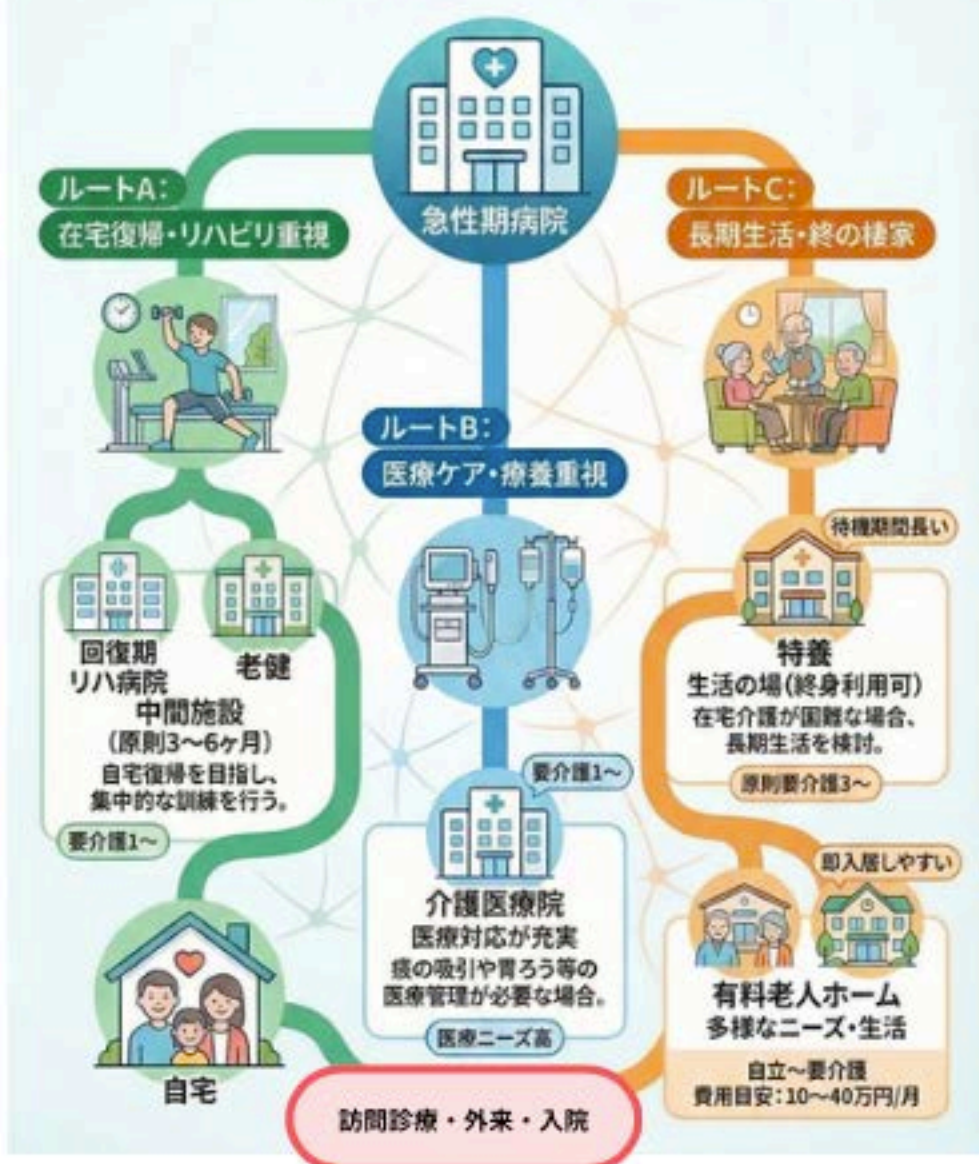
兼務することで、自分の外来で通院が難しくなった患者さんを訪問診療に繋げた後も、継続的に診られるようになりました。

みんなの在宅クリニック守谷との連携が多くなった頃、慶友病院でも訪問診療が本格的に動き出すようになりました。今では訪問診療部門が立ち上がり、ますます在宅医療にも注力していきます。

「訪問診療専門のクリニック・病院併設型の訪問診療がありますが、違いは何でしょうか？」

病院併設型には、入院病床があるのが大きな特徴ですね。精密検査や治療の設備が整っています。最近では訪問診療のクリニックから入院や検査の受け入れ相談が増えてい

## 急性期病院を退院した後の「次」の場所： 目的・状態別フローチャート



「訪問診療を利用したら病院には行けない」と捉える風潮がありますが、実際は違います。ぜひ病院をうまく利用してほしいです。この地域で訪問診療と病院の垣根をなくしたいと思っています。

**連携で「地域一丸」を目指す**

「地域における円滑な連携に尽力されていますが、ここに至るまでに苦労したことはありませんか？」

もちろんあります。「決まった連絡ツールが無い」のが大きいです。介護・福祉の関係機関とは複数の連携ツールがありますが、医療機関同士では実現されていません。いまだに電話やファックスが主流で、これも課題ですね。

患者さんのニーズは様々なので、対応するには病院と訪問診療の連携が必須です。一箇所が頑張るのではなく、地域全体で一丸となって取り組まないといけません。もちろん医療のみならず、介護・福祉の事業所との連携も重要です。

既存のシステムを改良するだけでなく、持続可能なものにしていく必要があります。その仕組み作りも僕の仕事だと思っています。

**慶友祭から、未来の医療職?!**

先生は地域活動にも積極的に取り組まれていますよね

そうです。新型コロナウイルスの流行で、外来患者数が減ったこともあり、当院も新しいアプローチ方法を考えないといけないと感じています。地域に根差した病院になるためには、まずは「うちはこんな病院です」と知ってもらわなければならない。毎年秋に行われる「慶友祭」もその活動の一環です。

また、子どもたちが「病院で働くこと」のイメージを持つきっかけづくりも意識しています。病院の様々な職種が存在や業務内容を知ってもらおうことで、未来の医療者育成にもつながったら嬉しいです。病院は「怖い」「痛い」など、マイナスのイメージを持たれがちなので、少しでも恐怖心が減ればさらに良いですね。

先生の診療において、心がけていることはありますか

たくさんありますが、病気の話ばかりしないようにしています。ご家族や生活のことなど「その方ならではの会話」を意識しています。また、パソコンばかり見るのではなく患者さん・ご家族に体ごと向けて話を聞くよう徹底しています。

医師にとっては「多くの患者さんの中の一入」かもしれませんが、患者さんにとっては「たった一人の医師」です。これを念頭に置くことで、少しでも僕の存在が心に残ったらと思っています。

医療法人慶友会 守谷慶友病院  
多岐にわたる専門外来を有する総合病院  
茨城県守谷市立沢980-1  
ホームページはこちら▶



## 医療に暮らし全体を支える視点を、「健康寿命」伸ばすために

「ご家族に意識していただきたいことはありますか？」

診療時は、ご家族に病状の説明や患者さんとの接し方についてお伝えすることもあります。ご家族は仕事をしていたり、それぞれ家庭を持っていたりする方も多いです。

その中でも、患者さんのことを出来る範囲で一緒に考えてほしいなと思います。患者さんを支えるのは医療だけでなく、ご家族の協力もあって機能するものだからです。

「いくつかの地域課題に触れてきましたが、他にはありますか？」

いわゆる「2025年問題」ですね。団塊の世代が75歳を越えて後期高齢者の数が急増していることを指します。守谷近隣も例外ではありません。ご高齢になると、様々な病気を抱えている中で認知症を発症したり、生活の困りごとが増えたりします。医療・介護・生活のニーズにより目を向けていかないといけません。

そうになると「健康寿命」（介護や生活上の制限が無く健康に過ごせる期間）を延ばすことが求められます。平均寿命との差を埋めて、元気な時間を長く過ごしていただく方法を考えていくのが、僕の中のテーマでもあります。疾患だけでなく、暮らし全体を支える視点が医療にも求められています。

### 相談できる身近な存在に

最後に、読者にメッセージをお願いします

患者さんだけでなく、そのご家族やご近所さんなど、何か困ったことがあった際に一番最初に相談できる病院でありたいです。



高齢化が進む地域課題を見据えて、

「家族丸ごとの支援」

「一人ひとりに合った優しい医療」

を目指し、青柳先生の熱い思いを聞かせていただきました。

（聞き手・イマイマイ）

### 青柳 滋 氏

医療法人慶友会 守谷慶友病院  
副院長／脳卒中センター長

守谷近隣で幼少期を過ごす。自身の祖父とのやり取り、「近所のじいさん・ばあさんが困った時に役に立ちたい」と感じた思いが今の原動力に通じている。

東京医科大学出身。同病院や茨城医療センターを経て2022年より守谷慶友病院に赴任。専門分野は脳神経外科・カテーテルを使用した脳血管内治療・脳卒中診療・頭痛診療

